至宝の翠妃

由宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
至宝の翠妃

【Ｎコード】
Ｎ３０７１Ｊ

【作者名】
由宇

【あらすじ】
誰よりも、何よりも大事にされたことなんて、一度もない。
だから、私は・・・夢に、堕ちる。
人と接するのが苦手な女の子は、
悪魔との取引で自分を護る騎士を手にする。
「あたしはただ、あたし自身を求めてほしいだけだった。」
愛されっていうか最早盲目的に。

現代・主従・溺愛傾向・逆ハー・・・興味のある方は、是非。

００　はじまり

誰よりも、何よりも大事に思われたことなんて、一度もない。
だから、私は、

かすかに鳴るカチカチという携帯のボタンの音。白すぎて眩しい画面を目を細めながら睨みつけた。
メール作成画面を出して、宛名を電話帳から探し出す。一番仲良くしている「友達」の名前。
本文画面に切り替える。――そして、それまでせわしなく動かしていた指を、止める。
大した用事があるわけじゃない。ただ、暇なだけだ。

ただ孤独で、
孤独で。

こわかった。

結局メールを送るのを諦めて、画面を待ち受け画面に切り替える。
そのままぱちんと閉じると、白いカバーをかけたラブソファの上に放り投げた。

しつこいとか思われたくない。
ＫＹとか、思われたくない。
そんないいわけばかり言うけれど、つまるところはこれ以上失くすのが怖かった、
――ただ、それだけで。

ぐっと、膝を抱え込む。顔の横の窓から差し込む光の筋が、床を光らせる。

どうせこの学校を卒業したら、途切れるだけの関係でしかない。
分かっているくせに、せめて今だけはとしがみ付いていて。
そのくせこれ以上の関係になるにはどうしたらいいのかわからない。

結局の所、何処までも私は甘ったれで、意気地なし。

大嫌い。

ぎゅっと目を閉じて、腕を解いてごろんと横たわった。
このまま眠って、目覚める前に心臓麻痺だかで死んでしまえたなら。
そう考える傍らで死ぬことを恐れているのも事実で。本当に、気持ちが悪い。
まるで、自分が二人いるみたいだ。
薄く笑って、私はまどろみの中へと堕ちていった。

数え切れないほど願った夢は、到底叶えられる筈もないものだと自分が一番わかっていたのに。

薄い灰色の靄(もや)が、不完全な人の形を成して私の目の前に歩み寄る。
・・・これは、夢か。

『こんにちは、お嬢さん。』

まるで風が囁いたように、希薄な声がその靄の口から漏れる。
ぼう、とその声にすら流されるように、その靄の人間（仮）は左に流された。
・・・それとも、幻か。

「だれ？」

幻に挨拶をされるなんて、随分珍しい経験をしたものだ。
そして、幻に誰、と聞いたのもきっと私が初めてに違いない。
なんだかおかしくなって、ふ、とかすかに笑う。
靄の人間（仮）は滑稽な道化のようにぺこんとお辞儀をした。
その勢いのせいで、頭が吹き飛んでなくなって、また暫くして戻ってきた。

『ぼくは、夢を喰らって生きる悪魔です。』

悪魔。よりによって、ファンタジーの存在。
私はこんな夢幻を見るほど夢に飢えていたのか？

『貴方の夢、かなえて差し上げましょうか。』

ああ、馬鹿らしい。
夢を喰らう悪魔が、よりによって夢を叶えにやってきたとでもいうのか。
こうして頷いたら夢を喰われて廃人にでもなるのがこの系統のセオリー。
先が分かりすぎる。本当に、くだらない物語だ。

「あんたにまるで得がないじゃん。下手な詐欺だね。」

つまらない夢なら、早く醒めてしまえばいい。
これ以上虚しい思いをするのは、もうごめんだ。

『得なら、あります。』

意表を衝いたその言葉に、小さくへえと呟いて、先を促した。
何が楽しいのか、デフォルトでそうなのか、悪魔とやらは三日月形に上がった口角をにんまりと更に引き上げた。

『貴女がその夢をかなえれば、貴女が一生に見る夢よりも多い不毛で甘美な夢が巷に溢れましょう？
何、幾人かの記憶を弄り人格を矯正し短い一生を踊らすだけのこと。
世界に支障なぞでやしません。』

ああ、と小さく息を吐いた。

「さすが、夢だね。」

馬鹿みたいだ、こんな夢を見て。
目が覚めたら何時もと同じ、くだらない見せ掛けだけの日常に戻るに決まっている。
靄が随分色を増したことなど、どうでもいいと思った。

「できるものなら、やってみるがいいよ。」

靄の口角に、皺がよった。

００　はじまり（後書き）

これはあくまでノリで書いた産物です。
あまり注意して見たりしないでください・・・↑

01　たしかなへんか

あの夢が醒めたその日の晩。
母さんは異常に機嫌が良くて、夕食から風呂からすべて自分でやってなおかつ鼻歌を歌っていた。
いつもだったら「女の子なんだから夕食の支度くらい手伝いなさい！」とキレ気味に言うくせに。
翌日。
朝起きるのが苦手な私はどうしてもぐだぐだとして切羽詰まった状況になる。
いつもだったら「女の子なんだから時間を持って身だしなみをちゃんとしなさい！」と怒る母さんが、
「仕方ない子ねえ」で済ませた。
登校してから、家の机の上に今日提出の課題を忘れたことに気付いた。
いつもだったら「では放課後補習に…」ってなる先生が、「仕方ないですね」で済ませた。
友達がいつもより優しかった。っていうか、良く構ってくれる、感じ。
帰ったら母さんが家中を掃除していた。仕事休んで一日中やってたらしい。おかげで見違えたよ我が家。

そして、そのまた次の日。…っていうか、今日。
放課後教室から出たら、「佐野先輩」と、名も知らない生徒から声をかけられた。
中学高校と帰宅部の私に後輩はいない。けれど、呼ばれたのは確かに私の名前。

「お時間頂けますか？」

「…はあ。」

見たことはある。去年の文化祭で。
文化祭の行事、ミス&ミスターコンテストでミスター準優勝に輝いた男子だ。
整っていてちょっと古風な堅い雰囲気と生まれつきの柔らかな茶髪とのギャップがいい！
そう言ったのはたしか隣クラスの友人だったか。
そんなキラキラした彼が目立たない私に一体どんな用があるというのか。
こころなしか緊張した面持ちの彼と、それに曖昧な返事を返すきょとん顔の私。
へーんなの。
誰よりも先に状況把握を放り投げた、私であった。

その後、請われるままに彼の後について歩き、がらりと開けたそこは無人の空き教室。
椅子を引かれ、そこに座れば彼は私の前にさっと立った。そうして開口一番発した言葉。

「お久しぶりです、善音(いおん)様！」

…はい？
気づけば彼の表情は緊張と一緒に赤みを伴って、目がきらきらと輝いている。
いや、待て。名前呼び＋様付け？一体どうしたというのだこのイケメンくんは。
アニメでいれば一気に背中に星や花が飛び散っている状態。きらきらきら。

「ええと…あの、」
「俺、内田篤雪です！幼稚園の頃面倒みていただいて、」
「…ごめん覚えてない。」

そんな話があったのだろうか。頭を抱える私に彼は優しく仕方ありませんよと言った。
そうして、過去を語り始める。

曰く、私と彼は幼い頃家が近所だった。
曰く、私は彼を弟のように可愛がっていた。
曰く、彼は幼稚園年少の段階で（つまり私は年中で）親の都合により転勤することになった。
曰く、彼はずっと私に恩義を感じていた。
曰く、彼は私に再開して恩返しするべくここを受験した。
曰く、私をずっと探していたが、手間取りこんな時になってしまって申し訳ない。

…へえ。
彼のきらきらした多分大幅な誇張ありの話を掻い摘めばこんな話で。
その恩返しとやらがどうして様付けにつながるのか。
疑問に思ってやんわりと問えば、彼は至極当然といった顔で言った。

「善音様は俺の絶対です。女神様です。善音様に優しく接していただいた過去は俺の一生の宝です。
今までできなかった分まで一生お尽くしいたします！」
「……ああ、うん、そう。頑張ってね…。」

これの他に、何を言えるというのだろう。
こんなにも期待や夢でいっぱいです、と全身で表現している彼を前にして。

その後、駅まで半強制的にエスコートされた善音が家にたどり着いて真っ先に母に問うたのは、
「母さん、内田篤雪って知ってる？」の一言だった。
そして母は瞬いて、首をかしげた。

「内田？…小さい頃遊んでたわねえ。主にあんたと篤雪くんがお兄ちゃんを追い回してたけど。」

…優しく、接してもらってた…ねえ…。

01　たしかなへんか（後書き）

放置続いて申し訳ありません。

内田篤雪（うちだあつゆき）

忠犬タイプ。他の人には尾を振りませんが主人にはすり寄ります。

遺伝で髪に少しだけ白いメッシュが混じってます。

02　むじかくばくだん（前書き）

お久しぶり・・・です。
パス忘れたりなんやかんやでこんな時期に。
覚えてる方いますか？↑

02　むじかくばくだん

内田篤雪というなんだか妙な後輩に懐かれた。
それだけで終わらせるには、あまりにもできすぎている。

だって、可笑しい。
幼稚園の頃の話なんて覚えてるほうが珍しいのに、それに加えて美形が忠誠だ何だと騒ぐなんてありえないじゃないか。そんなものが実際に存在しえるのはべたで程度の低い物語の中だけだ。更に加えて、周囲の様子も徐々に変わっている。
私に対してただ只管に優しく、甘くする方向へ。
私はクッションを抱えてベッドの上に寝転んだ。お日様の匂いがするのは、きっと母さんが布団を干したからだ。今日も母さんは仕事を休んだ。仕事を放り出してまでやらなきゃいけないことか、それは。

歪められている。
私のすぐ近くから、確実に。
それはなぜ？

――――かなえてさしあげましょうか

ありえない。
あれは、夢だ。
夢だった筈なのだ。
私は目を閉じた。

考えることすら億劫だった。

『戸惑っていらっしゃるのですか？』

靄が居る、白い世界。
靄は前回よりか幾分形の整ったピエロのような形で、口だけを動かした。

「あんなの私の夢なんかじゃない」
『まだ準備段階でございます』

しかしすでにいくらか旨い不毛の夢が産まれ始めましたけれど。
そういって靄は笑う。笑う。歪な歪な、道化師の笑み。気色悪いからやめろ、払うように手を振ればそれは一瞬宙に溶けて、また人の形を再構成する。
まったく腹立たしい。

『内田篤雪、彼は逸材でございますよ。スポーツ万能、護身術も身につけている。あれが貴方様のお傍にあれば』
「彼はモノじゃないだろう」
『モノも同然でございます、貴方の命に従えば』

切り返しが早いこの靄は、くつくつとやっぱり笑い続ける。

『せいぜい利用なさいませ』

言いながら風に流れていく靄を睨みながら、私は低く呟いた。

「いつか握りつぶしてやる」

翌朝。
やっぱり張り切った母さんはそのままで、朝食を済ませて家を出た私を待ち受けていたのは、やっぱり無駄に爽やかにおはようございます！と挨拶を投げかけてきた内田篤雪だった。あの靄が何かしていたことに間違いはないらしい。傍迷惑な奴。
内田篤雪は噂に違わぬ好青年で、そして想像していたとおり甘かった。私が夢見ていたことを現実にするといっていた靄の言葉が本当なら、そうなるとは思っていたけれど。鞄持って、歩調合わせて、道路側歩いて、障害物は全てさりげなく避けさせて。そんなことをしながらずっと頬を染めて「善音様善音様」と見えない尻尾をぶんぶん振り回しながら話しかけてくる。
予想通りすぎて、ぶっちゃけうざい。
そして学校の中でも人気者の容姿端麗な彼にそうやってくっつかれている私への好奇の視線も相当なもので、私はひとつため息を吐いた。すぐにぴこーんという音がつきそうな勢いで反応した内田が振り向く。

「内田」
「篤雪って呼んでください、善音様！で、どうしました？」
「…佐野先輩って呼んでくれるかな」

ここが妥協ライン。正直この勢いで来られたら困る。クラスで浮くのも必然で、ついでに他の主に女子生徒からの攻撃も必然と化そう。いろいろ縁があって懐いた後輩と先輩といった関係のほうがまだやっかみやらは少なかろうというものだ。———だからといって、来

るなだの今までと同じにしろと言ってみろ、私の想像する忠犬キャラは即ヤンデレと化す。忠犬もヤンデレも、想像しているうちが楽しいんだ。現実に居たら今の私みたいに胃が痛む。絶対に。

「善音様じゃだめですか？」

立ち止まった彼は予想通り、酷く切なげな顔で言った。非常な飼い主（たし）一（わ）は容易く首を縦に一回。

「誰かに見られる可能性のある場所でそれ以外で呼んだら、もう返事しない」

「わかりました佐野先輩僕頑張ります！」

必死な顔で握りこぶしを作り宣言した後、内田…篤雪は小さく口の中で「佐野先輩佐野先輩佐野先輩佐野先輩佐野センパ」と繰り返していた。奇妙な光景だし気持ち悪いが、その姿すら音声さえ聞こえなければ無心に何かに備え集中する美青年といった風情になるのだから美形は得だ。

とりあえず無自覚爆弾、処理完了。

朝から妙に疲れたなあと、私は思わず小さく肩を回した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3071j/

至宝の翠妃

2011年1月31日20時46分発行